

ノ如シト云、コノ鴉タゞ一雙ニシテ餘鴉ノ混ゼズ、又蕃生セズシテ、年々産スルモノ雌雄ノミニシテ、其餘アルコトナシ、年毎ニ父鳥雖ノ成長ヲ待テ、十月廿日ヲ以テ必ズ去ル、ソノ夜月出ノ前ニ悲鳴良久ク別ヲ惜ムノ狀アリ、而遠ク飛去ル、歳日違フコトナシ、父鴉コレヨリシテ黒髮山ニ往テ棲ムト云、靈奇トモ云ベキコトナリ、

烏利用

〔本朝食鑑六林禽〕烏鴉〇中

肉、氣味酸澀、平無毒、病則忍之、可食、宜炙食、不煮食、主治骨蒸勞嗽、婦人血症、小兒痲疖、或殺蟲治瘦、

〔食物和歌本草二〕慈烏

烏すくまは、ゆく平毒はなし、勞を補ひ人をこやせる〇中 烏こそ魚のほねたちぬげざるに

煮て食すべし又灰も吉也

烏雜載

〔萬葉集七雜歌〕臨時

曉跡アト夜鳥ヨカラス雖鳴ウナク此山上コノミ之木末ノキノヘ之於者ニ未靜イダシク之

〔萬葉集十六〕高宮王詠種物歌二首

婆羅門バラモム乃ハ作有流ツク小田コタ乎ハ喫カハム烏臉腫カラスノオモ而幡幢ハネノタテ爾居ニ首〇一

〔枕草子一〕秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして、山ぎはいとちかくなりたるに、烏のねどころへゆ

くとて、みつよつふたつなど、とびゆくさへあはれなり、

〔枕草子二〕にくきもの

からすのあつまりて、とびちがひ鳴たる、

〔散木弃詞集十隱題〕からすのす

いづみからすのすきひたりあま君にあまのりあふれさ、せもうさん

〔夫木和歌抄二十七〕六帖題

權僧正公朝